

# 薬史学会通信

No.22 1996年 2月

〒113

東京都文京区弥生2-4-16

㊤ 学会誌刊行センター内

日本薬史学会事務局

Phone (03) 3817-5825

FAX (03) 3817-5830

## 日本薬史学会'96(平成8)年度総会 講演会のお知らせ

と き 1996年(平成8)年4月13日(土)午後

ところ 東京大学薬学部記念講堂(文京区本郷)

12:00～ 評議員会

13:00～ 総 会

13:30～ 総会講演

秋葉保次(日本薬剤師会)：健保体制下の薬剤評価の変遷

山崎幹夫(千葉大薬学部)：日本における薬学の成立

——比較文化類型論的立場より——

16:00～ 懇親会：東大医学部図書館地階食堂(会費・3,000円)

(総会講演会は、日本薬剤師研修センターと共催で行われ認定薬剤師制度の対象となっております。ご来聴を歓迎いたします)

### ○日本薬学会第116年会(金沢)薬史学部会

1996(平成8)年3月28日(木) 金沢大学工学部 …………… 11ページ参照

### ○第5回医薬史蹟を訪ねる旅(中国)

日程(予定) 10月10日(土)～10月24日(木) …………… 11ページ参照

### ○第33回国際薬史会議(ストックホルム・スウェーデン)

1997(平成9)年6月11(水)～14日(土) …………… 10ページ参照

## 第4回ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅 報告記

本年は第32回国際薬史学会がパリに於いて9月25日より開催されたので本学会主催の標記ツアーの参加者9名は添乗員の深沢敦氏と共に9月28日(木)成田を発ち同日夜パリに到着した。ホテルで国際学会出席のため先行した3名と合流して、29日はパリ市内での自由行動による時差調節の後、ツアーの主目的地をわが国近代化の推進力となった蘭学の情報発信地であるオランダとくにシーボルトゆかりのライデン大学を訪れることとした。パリの学会を終えて週末をベルギーで過ごすプランで30日に空路ブリュセルに飛んだ。翌10月1日にバスでブルージュを訪れた。10月2日、バスでライデンに移動したが、特に国境を越えるという意識も持たずに高速道路を走って昼食の休憩所がオランダなので両替をしたというだけのことであった。10月5日までライデンに滞在したがBeukers教授や薬剤師のDr. A. Bierman, Dr. Gelderの諸氏に大層お世話になり、10月6日午後一同元気で帰国した。以下に参加者の印象記を掲載する。

### パリの印象

#### 片桐あかね

この旅行で一番印象に残った所はパリではありませんが、旅行に出る前に一番思い入れが強かった所は間違いなくパリです。それはパリを訪れるのが初めてであり、しかも一日だけの滞在だったからでしょう。第32回国際薬史学会に合わせた旅行日程であるにもかかわらず、2日目のパリの一日は観光をして過ごすことに最初から決めていました。3日目以降のベルギーやオランダは父にお任せで、私の頭の中はパリでどこに行くかとか仏語がどのくらい通じるだろうか等で一杯でした。行ってみたい所や見てみたい物はたくさんありましたが、父との二人行動なので、これだ

けはするということを決めておきました。それは①メトロに乗る、②シャンゼリゼを闊歩する、③シテ島、サン・ルイ島へ行くでした。①については出発前に爆破事件があり、父は避けたがっていました、乗ってしまえばとっても便利なものでした。駅構内のあちこちに大相撲パリ公演のポスターが貼られていたのが目につきました。②については一度ジプシーの子供達が近寄ってきましたが、こちらの顔色を窺っている感じで全く問題ありませんでした。警備が厳しくなっていたことがこういう点では良かったようです。③に関して、シテ島ではサント・シャペルに行こうと決めていました。隣の裁判所に迷い込んでしまったためにシャペルに入ったのは閉館間近となってしまいましたが、傾きかけた夕日が射し込む案外良い時間だったようです。上部の礼拝堂はスタンドグラスで作られた鳥かごで、幻想の世界にしばしの間ひたっていました。これを書くにあたって改めて振り返って見ると、様々なことが思い出され、かなり充実した一日だったのだと感じました。

翌日空港で、あとはベルギー行きの飛行機に乗り込むだけという時、空港のレストランの調査に答えてもらえないかと声をかけられました。パリで調査をされる側になったことは、普段調査をする側である私にとって大変印象深いことでした。

### Brusselsを訪ねて

#### 藍沢早智子

出発前、恥ずかしながらBrusselsについて知っていたことといえばEC本部があり、第1回のICHが開催された都市ということくらいでした。

パリを発ってBrusselsに着いたのは10月1日の昼すぎ。日本から音楽の勉強に来ている

という若い女性のガイドさんが待っていてくれました。Brussels 滞在は半日の予定です。昼食は機内で済ませていたのですぐに市内観光に出発です。

まず、アトミウムに向かいました。1958年の万国博覧会のために作られたモニュメントだそうで、鉄の分子模型を1650億倍に拡大したという巨大な銀色の9個のボールからなり、その中は現在科学博物館として使用されており、高さ120メートルの展望台からの眺めも楽しめました。バスの中からはEC本部の建物が見え、そのすぐ側にはEU本部の建物がありました。EC本部の方は今は使われておらず、別の目的に使われることに決まったとの説明がありました。次にバスを降りたのは最高裁判所の前です。19世紀末のグレコロマン風建築とのこと。次ぎは王立古典美術館です。古典様式の宮殿だというどでかい建物に14世紀から19世紀までのフラマン画派の絵画が中心に収められているとか。ブリューゲル、ルーベンス、ファンアイク等々威厳ある大作にすっかり圧倒され、19世紀絵画の部屋にスーラやゴーギャンの絵を見つけたときには正直なところホッとしました。つぎはかの有名な小便小僧です。彼は思っていたよりはるかに小柄でした。グランプラスはすぐ近くでした。110m×70mの広場で15世紀に建てられた市庁舎、16世紀に建てられた王の家、17世紀に現在の石造りに再建されたというギルドハウスなどに囲まれています。今ではすっかり石の表面が黒ずんで曇り空の下ちょっと陰気でしたが、その昔すばらしいその威容を誇っていたことは容易に想像されました。宿泊はアストリアホテルです。歴史あるクラシックなホテルとのこと。エレベータはドアを手で開けるアンティークもの。また朝食はコンチネンタルスタイルをしっかりと守っていました。夕食はグランプラスの裏通りヘムール貝を食べに行きました。狭い通りいっぱい椅子やテーブルが並び、軒下に備えつけられ

た暖房器がテーブルの人々を暖めていました。バケツのような大きな器にはいったムール貝を食べている人々。そしてここは南国かと錯覚しそうな陽気で調子いいボーイさん。ついついワインもすすみました。次の朝バスの出発まで少々時間がありました。しめた！地下鉄に乗りに行こうと思いました。ホテルから一番近いPark 駅へ降りてゆきました。うす暗い広いホームには人がまったくいません。勿論駅員さんの姿もありませんでした。あの時の緊張感は今も忘れられません。あの1時間ほどの地下鉄の旅は私は忘れえぬBrusselsの思い出です。

## ブルージュの印象

奥井登美子

ネーデルランドと呼ばれている地域は、現在のオランダ、ベルギー、ルクセンブルグを併せた地域である。北中部はゲルマン系の人種が多く、南部はフランス人と同じケルト系が多く、カソリックが優勢である。中部でゲルマン系でカソリックという地域が、今のベルギー国である。

ブルージュは15世紀(1477年～1555年)の頃、ヨーロッパの中でロンドンにつぐといわれた位、この地方きっての繁栄都市(人口は20万人)であった。毛織物を中心にして、すべての産物の集散地として栄えたこの都市の衰退は、北海に注ぐ水路に泥が堆積して浅くなり、大きな商船が出入り出来なくなったためといわれている。おかげで私たちは、中世の建物、中世の水路、中世の町がそのまま伝説になって残ったような美しい街をたのむことが出来た。

10月1日、日曜日のせいか観光客で賑わっていた。石の建物と、水路、そして少し紅葉した木の葉の、落ちついたハーモニーは、どこを切り取っても絵になる風情であった。水の都でこれほど美しい場所をほかに知らない。

メモリンク美術館 聖ヨハネ病院の一隅に

ある。ムムリンクの作品が集めてある。キリスト教関係の絵であるが、中には真中にイエスキリストが画かれ、横にその家の代々の家族の顔があるといった、何世代かの家族たちがキリストと同じ一枚の絵の中に再現されている神秘的な絵が多かった。またここには17世紀の薬局がそのまま展示されていた。

グルーニング美術館 ファンアイク、ムムリンク、ボッシュ、ブリュゲルなどこの国で活躍した画家の絵が小さな美術館の中にかくさん展示されていた。ファンアイクの細密画のような絵は、ヨーロッパ中からこの絵だけのファンがいて押しかけるそうである。

マルクト広場で地ビールと、ビールで牛肉を煮たカルボナードと、鳥肉の水煮ウォーターゾイを食べた。ベルギーの名物はビール、牛肉、レース、絵画修復と本の装丁だとか、若い頃一時絵画の修復業を志したことがある私としてはこのような美しい水都で絵画の修復でもやっていたら最高の幸せだと思う。

宿の名はホテルメディチ。お隣りが小中高校で、またこれが夢の様な落ちついた塔のあるレンガの建物、安野光雅の画く世界。でも現実に子どもたちが通っているので不思議であった。

世界には、このような美しい水都が残っている。そう考えただけでうれしくなってしまうような場所であった。

## デン・ハーグのオランダ薬剤師会会館を訪ねて

大橋 清信

10月3日は、1574年ライデン市民が英雄的抵抗によりスペイン軍を撃退した勝利の記念日であり、街を挙げてお祭騒ぎの混雑が予想された。数日前のパリの国際薬史学会で末広・山川・岩井の諸先生とご一緒に顔見知りの、ロッテルダムでの開局薬剤師でもあるアンネット・ビーアマン女史を、この日朝9時過ぎにライデンの宿舎に迎え、女史の案内でバ

スは一路南西19キロのデン・ハーグに向かった。ハーグの官庁街に入り、ナポレオンからの解放を記念するその名も1813年広場を過ぎてアレキサンダー街に面する、オランダ王国薬剤師会、すなわち Koninklijke Nederlandse Maatschappij ter bevordering der Pharmacie(KNMP)に到着した。

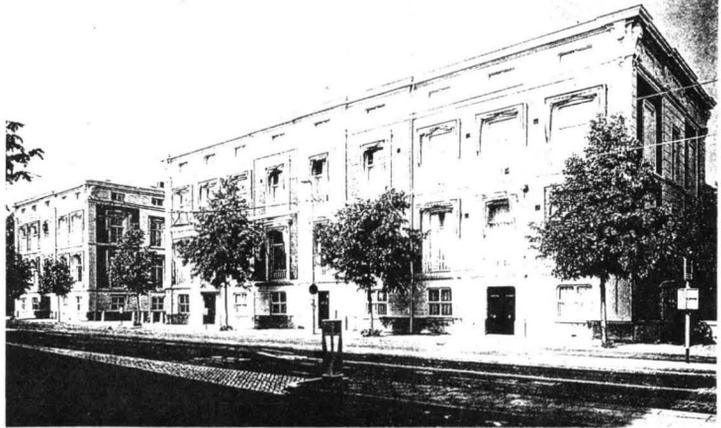
会館は堂々たる三階建て二棟から成り、早速応接ホールに案内され、専務理事格のド・ブレイー氏、ワッセナー、ブーマスなど幹部諸氏と挨拶を交わし、茶菓の接待のもと、KNMPのシンボルや展示品を話題に、ビーアマン女史の幹旋もあり、たいへんうち解けた雰囲気であった。次いで案内された館内の試験室は実験台が6面もあり、製剤の品質保持に大きい役割を果たしているとのこと、また図書館では書棚に清水藤太郎先生の『日本薬学史』も見え、わが国の江戸時代に野呂元文の『阿蘭陀本草和解』の原典であるドドネウスの『草木誌』Gruydt Boeck 1608年版の扉をコピーして頂くなど、蔵書の量質ともに史料価値の高さのほどが偲ばれた。

1992年の創立150年を迎えた折りのKNMP週報記念号その他資料を頂いた。その記念号にはトロンプ会長が述べておられる次のような一節がある。

By satisfying the expectations of the client, we will be able not just to publicize our profession of pharmacy, but also to advance it.

Pharmacy is a science. Practising the profession has many sides. The facet dealing with providing service is concerned with society. This is what we want to show in this anniversary issue. It is the provision of service which the Dutch pharmacist will be focusing on in the future.

昼食の供応を受けたのち会館を辞した次第だが、午後もビーアマン女史およびKNMPの幹部の方々の案内と好意に委ねた一日であった。



## カタリナ病院博物館（ゴータ市立）

内藤記念くすり博物館 岩井鈺治郎

中世の病院を利用した博物館で、外から見ると壁が傾いているように見えたが、中に入ると立派に修復されている。この病院は1302年に創設され、現在の建物の後部は14世紀のものとの事である。

博物館は21の展示室に分けられていて、第1室が病院薬局、第16室が外科医の部屋として復元されている。

入口を入ると広い部屋があって、それに続いて古い様式の数個の小部屋を通り抜けた先に大きい病室がある。その左手奥の小さな入り口から入ると病院薬局がある。

この薬局は1665年この病院の大改装のときに作られ、利用されてきた。入口と同じ幅で4、5メートル程の廊下が真っ直ぐに壁に突き当たっている。入口から見ると右手にカウンターがあって、その内側が5、6メートル程の奥行きがある板の間になっていて、壁にはアーチ状に薬品棚が天井近くまで作られ、いろいろな種類の美しい薬瓶が並べられている。正面奥の棚の上にアスクレピオスの金色の木像がたてられている。棚から1メートル程はなれて、棚に沿う形で調剤台が作られ、調剤台には定量測定装置やメスシリンダー、試験管、コルク栓圧縮器など古い薬局方などが今なお使われているかのように置かれて

いる。アーチ形の調剤台の間には大きな乳鉢、乳棒が二つ用意されている。この展示は18世紀後半を再現したものである。

大きな病室の横から2階に上がり、突き当たりの第16室が外科医の部屋、真中に木のテーブルがあり、その周りに椅子が8脚並べられている。いずれも複製とのことである。

ここには、多くの資料が並べてあるわけではないが、頑丈な椅子や机を見ると外科医らの奮闘が感じられる。

たまたま、地下の第14室におりていったら、水風呂や精神病患者を拘束する椅子などがあって展示用に整理していた。ここは、1939年から博物館として利用されていて、なお増設しているところなのであろう。

## コーリンヘムのヘルダー薬局を訪ねて

宮本 法子

10月3日の午後、ゴータ市近郊のコーリンヘムのヘルダー薬局の二階は活気にあふれていた。オランダ薬史学会会員のヘルダー氏は、総勢13名の私たちを前に個人コレクションをご披露してくれていた。

デルフト焼や中国製などの薬ビンやシロップ入れをはじめとして、かつてインディアンが使用したと言われる「ドドニウスの薬草本」などの貴重書を丁寧に熱心に説明して下さり、私たちはすべてを直接手にとって見る

ことができた。

突然訪れた私たちを心から歓待して下さり、オランダの伝統的な家庭料理を用意して下さいました。

ヘルダーご夫妻とも汗まみれになっての歓待ぶりに私たちは感動した。ただ、歴史的なコレクションを見ることで時間が過ぎ、一階の薬局を素通りしてしまったことが最後まで心残りであった。

帰国後、オランダの薬局や薬剤師のことに興味を持ち始めた。ライデン、アムステルダムで薬局をあまりみかけなかったからである。実際に薬局は少ないのだろうか。

確かにオランダは歴史的に薬局、薬剤師の数が少なく、今も意図的に薬剤師の数を制限しているという（年間100名程度）

オランダの医療制度はホームドクター制が中核となっており、オランダの住民すべては近所のホームドクターに属している。医師は簡単には薬を処方せず、薬剤師は医師の処方なしに薬を売買できず、薬局は単純な薬品のみを扱い、オランダ人は不必要に薬を使用しないということである。

なお、人口密度の低い地域には薬剤師のほかに dispensing physician といわれる調剤のできる医師がおり、さらに地域薬局には薬剤師をはじめとして三階層の薬局従事者が存在する。

最近、少しづつ分かってきて、ますます興味が湧いてきた。オランダは1993年に世界に先がけて「安楽死法案」を可決した国である。今後このような医療観の中で薬剤師がどのように活動しているのか、じっくりと調べた上でもう一度ヘルダーご夫妻の薬局を訪れたいと思う。

## ライデンの印象

山田恵美子

ライデンに到着した日は、町を挙げてのお祭り（1574年スペインより解放された日を記

念しての前夜祭）の準備でごったがえしていた。大学を訪ねてみたものの休日で門は閉鎖されて入れず、その日は付近にある有名なシーボルトの住んでいたことのある住居跡を訪ねた。

一行が町のレストランで夕食をすませ、帰る頃には前夜祭の出し物を見るための人々で沿道は埋め尽くされていた。

翌10月3日は王立オランダ薬局協会からハーグを通り Gorinchem の薬局を案内される。古い薬壺のコレクションをみせてもらう。この APOTHEX のオーナー Gelder さんご夫妻の歓迎をうけた。殊に奥さん手作りの郷土料理の御馳走で心暖まる一時を過ごしたことは想い出深い。

10月4日はライデン大学訪問。BEUKERS 教授から大学設立1575年以來の概要について説明をうける。その後標本室へ案内される。

人間発生から胎児、新生児、奇形、シャム双生児等数多いコレクションがあった。中には未開の地より手に入れたのか数珠様の飾りを手足に巻かれた標本も見受けられた。

生理学では、日常診療に使用される心電計の原形が保存されており Eindhoven はライデン大学の教授であったことの記憶を新たににした。

校内には医学・解剖学に次いで植物学も重要視され大植物園があり、中にはリンネの胸像や日本より種を持ち帰ったシーボルトの胸像がある。これら学者の功績が偲ばれた。丁度帰りがけに卒業試験合格者の発表が行われたのか、両親やら祖母と思われる人、先輩らしき人々から花束を貰い祝福されている若い男女の微笑ましき光景がみられた。

最後に印象に残るのは解剖台を中心に挿り鉢状に作られた階段のある解剖学教室の復元である。腑分けする医学者、それを見詰める人々の真剣な眼差しに昔の腑分けの光景が思わず彷彿と蘇った思いであった。

BEUKERS 先生はここでお別れの挨拶をさ

れ我々一人一人に握手され帰られた。

その後私共は日本語学部を最後に Sylvius はじめ世界的に有名な学者を生んだ古き伝統あるライデン大学を後にした。

最後にライデン大学に関して片桐一男先生にお世話になったことを感謝します。

## ライデン今昔

片桐 一男

オランダのライデンには、1981年から翌年にかけて1ヶ月、青山学院大学在外研究で滞在したから、はや13年も以前のことになる。

「今回のツアーで、変わった処、変わらない処を」というリクエストに答えて。

1. ベルギーのブルックからバスでライデンへ。国境を確かめたかったが、今回も、もう一步ははっきり認識することができなかった。(これは、こちらが変わっていない証拠)。
2. ライデン駅が新しく建築中で、断然、明るくなった。のんびりした工事振りは、いかにもオランダらしく、未来永劫に不変とみた。
3. 10月3日の祭りの賑わいは変わらない。売っている食べ物、飲み物、ユネーパー、ソフトアイス変わらない。
4. ラーペンブルフの運河は、断然、キタナくなってしまった。私が一時滞在したインターナショナルハウスの外観変わりなく、なつかしかった。向かいのシーボルトが日本から持ち帰った品を初めて展示してみせたゆかりの建物は変わらないものの、日本語の説明が新しくついていた。新しくついた点としては、他の建物にも下手な日本文字の落書きが多く眼についた。ライデンにいる日本人でない外人さんの筆跡であることだけは明記しておかなければならない。
5. 新しいアート感覚の建造物が増えた。街なみそのものは変わらない。市庁舎、協会、市場、なつかしい商店、スーパーVDも。

6. シーボルト、ブロムホフ、フィッセルコレクションを誇るライデン民族博物館、外観は変わらないたゞまいをみせているものの、日本関係の展示がガラッと変わっていた。シーボルトが江戸参府で使用した駕籠を皆さんに見ていただき、説明を加えたかったのであるが、見えなかったのは残念。(国立教育会館の教養講座シリーズ58<シーボルト>にゆずりたい)

7. 前回は、ハーグの古文書館やライデン民族博物館で調査、VOC史跡調査などが主であったため、今回、ポイケルス教授に医学史関係施設を組織的に説明・案内していただけたことは、蘭学史研究上有意義であった。
8. 日本学センターは変わりなく、なかの教授陣も、古い人、新しい人、10年としての変わりようであろう。
9. アウデ・ライデンで、伝統的なパンネクッケンを試食いただいたことは、変わりなく満足であったが、本来のライスターフルを試食していただく機会のなかったことは心残りであった。
10. 全く忘れて、一言も出ないのではないかとおそれていたオランダ語、思いのほか、ただちに思い出せた(といっても、ナチュラルルックにはほど遠い)。言葉とは、その地に入り込むということが、いかに大事か、痛感した次第。
11. ホルトス ボタニクスでは、シーボルト像のまわりが、日本風のような庭園に模様がえされていた。よし、とみるか、否、とみるか、ひとによって受けとめ方がちがうだろう。その昔、米沢からの蘭学者からもらい受けて帰ったシーボルトが植えた植物、特に私の気にしていたツリガネ草が元気であったのをみて、ひと安心。  
会員外の参加者を暖かく受け入れてくださった、同行参加者の皆様に感謝いたしております。またオランダへ行きたい。

## オランダの薬学と薬学教育・研究

山川 浩司

第4回ヨーロッパ医薬史蹟の旅で、昨年の10月2日、デン・ハーグ市のオランダ薬学会(The Royal Dutch Association)を訪問して、懇談した際に頂いた資料をもとにオランダの薬学について記したい。

オランダ薬学会(薬剤師会)は1842年に創立されている。日本薬学会の創立は1880年で日本より38年早い、日本薬剤師会の創立は1893年である。1992年には創立150年を記念してヨーロッパ薬学会議をオランダで開催している。

オランダの薬剤師は総勢約3千名で、保健薬局薬剤師(1,800名)、病院薬剤師(500名)、製薬・卸企業薬剤師(300名)、その他となっている。薬剤師の70%は男性である。約8,700名の女性のみの調剤助手(Dispenser's Assistant)が1薬局に平均5名勤務している。高校卒業後3年の専門職教育を受けて調剤助手となる。

オランダの薬学教育・研究大学は4大学で、この内、薬剤師養成を目的とするもの2大学、研究者養成を目的とするもの2大学である。

ユトレヒト大学薬学部(入学定員200名)とフローニンゲン大学薬学部(入学定員130名)の2大学が薬剤師養成を目的として、6年制教育を行っている。

前半4年の基礎教育カリキュラムは次の通りである。

数学、物理学、化学(物理化学、分析化学、無機化学、有機化学)、生物学(細胞生物学)、微生物学(微生物化学)、生理学(病態生理学)、臨床化学、医薬化学、薬化学、製薬化学、製薬技術、調剤学、薬局方、薬物速度論、薬物動態学、薬理学(毒性学)、薬物治療学、など

後半2年の職能教育カリキュラムは次のとおりである。

分析化学、薬局方、品質管理学(合成と天

然物医薬品の理論と実際、GMP)、薬物治療学、医薬品化学(合成実験と管理)、調剤学、など

さらに6か月の薬学実務実習(保健薬局と病院薬局)

この薬学実務実習を修得後に試験を受け、合格すると薬剤師資格が取得できる。

日本の薬学教育と比較して基礎教育は大差がないが、しかし職能教育はより実務的で、日本では実施していない6か月の薬学実務実習(保健薬局と病院薬局)が行われている。毎年330名程度の少数精鋭の薬剤師が養成されているので、薬剤師の社会的な地位と評価は高いことが理解できる。

この他に、ライデン大学とアムステルダム大学に薬学研究者、技術者を養成する目的の大学院大学がある。以前には薬剤師の養成を目的としていたが、十数年以前から薬剤師養成教育から研究者養成大学に転換した。そのためこの大学卒業には薬剤師資格は与えられない。ほぼ全員が企業か研究機関に就職する。1990年からこの2大学は医薬品研究のための相互交流の大学組織になっている。

ライデン/アムステルダム医薬品研究センターの大学研究本部はライデン大学にあり、ライデン大学医学部とライデン大学病院もこの組織に含まれる。

ライデン大学の医薬化学センター

シルビウス研究所には臨床薬理学、毒性学、バイオ医薬品、薬理学研究部門がある。ゴルレアス研究所には医薬化学、製薬技術、分析化学、生薬学の研究部門がある。

アムステルダム大学の医薬化学部

医薬化学、分子薬理学、分子毒性学の研究部門がある。

この2大学にはオランダ国内の学生ばかりでなく、海外からの学生および大学院学生その他、多くの海外から博士研究員が留学して研究に励んでいる。日本からも多くの博士研究員が留学しているが、1994年には東京理科大

学薬学部の海保房夫博士（本会会員）がライデン大学に留学している。

## バスの窓から・・・

奥井登美子

オランダが今、世界的にリードしているのが「地球温暖化対策」である。オランダの国は41,000㎡でその4分の1が海面下である。温暖化で海面が上昇するとオランダ全体が水没してしまう。1989年、政府は世界で最も先進的な「国家環境計画（NEPP）」を発表、国民もそれを支持した。その年、オランダのノイトベイクの町に先進国が集まって「大気汚染と気候変動に関する関係会議」が開かれ「ノイトベイク」宣言として2000年までの二酸化炭素の削減案が作成された。オランダは国際的にも温暖化対策のリード役を果たしている。

チューリップの球根づくりなど園芸が最も大きな産物のオランダの農家で雨水利用など省エネルギー対策がとられている（バスの中でチャリと見えた風景）のも、この温暖化対策のひとつなのである。

## アムステルダム周遊記（10月5日）

末廣 雅也

ライデンを後にしたバスは朝霧でしっとりとした平坦な田園地帯をしばらく走ってスキポール空港の裏手から林の続くアムステルパークを抜けて大きな木製の風車の横に停まった。近くには野外でスケッチをするレンブラントのプロンズ像が立っているほかは自然のままに湿地帯の外れの池には羽の黒い鴨が遊んでいた。悠々と水の流れるアムステル川に沿って走って停車したところはオランダ名物の木靴の製造所で、製造工程を観覧する。

アムステルダム市内で最初に訪れたのは国立ゴッホ美術館であった。限られた時間であったがゴッホの画風の変化と色彩の移り変

りを識ることが出来た。彼が蒐集した日本の浮世絵とそれを模写した作品もまた興味深かった。

ゴッホ美術館の斜め向かいのダイヤモンド研磨工場をみてから「アンネ・フランクの家」に向かった。プリンセス運河に面したこの家は1635年に建てられたもので、今は急峻な階段を見物客が途切れることなく登ってゆくと、隠れ家だった時には限られた人達だけが窓を閉ざしてひっそりと暮らしていたのでそのストレスは測り知れないものであったと想う。

屋外に出て空を仰ぐと青空はまぶしく、アンネが屋根裏の古い窓から眺めて慰められたという西教会（ユダヤ人にとっては異教だが）の塔をみる事ができた。この塔の先端に輝いている王冠は神聖ローマ帝国皇帝マキシミリアン1世がアムステルダム市の紋章として使用を許したものと聞いた。

午後は「レンブラントの家」を訪れた。1606年に建てられた家をレンブラントが1639年に購入した後に破産するまでの凡そ20年間にこの家にアトリエを持って画業に励んだと云われているが、エッチングに使った器具が展示されているように、ここにはエッチングの作品が多数収蔵展示されている。自画像の細い線は顔に立体感を出すことに成功してさながら肖像写真のように見事なものであった。

見学を終えて近くの橋の上に立って運河を眺めるとモンテルバーンス塔が彼方に建っていて港街らしい風景であった。バスに乗りこみ秋日和のアムステルダム市街に名残りを惜しみつつスキポール空港に向かった。搭乗手続を済ませ、出国ゲートの所でライデン、デンハーグ、ゴード、コーリンヘム、アムステルダムと3日間お世話になったガイドの中江さんに見送られて出国手続をしてボーディンゲゲートに集まった頃はすっかり日が暮れ月が輝いていた。

# 日本薬学会第116年会（金沢）

## 薬史学部会

3月28日（木）

金沢大学工学部

（薬の発展および薬業史）

1. 伝統売薬「ウルルス」の研究  
大阪大薬：前平由紀ほか
2. 緒方洪庵の薬箱とその生薬（2）  
「將軍」および「規那」について  
大阪大薬：米田該典ほか
3. 近代日本医薬品産業の発展（その11）  
製薬企業のいわゆるプロパーからMRへ  
日本薬史学会：竹原潤ほか
4. 近代春日村における薬草流通について  
森の文化博物館：高木朋美ほか

（薬学教育史）

5. 明治時代の薬学教育 北陸地方の部  
日本薬史学会：小山鷹二
6. 第二次大戦後の日米薬学の比較（5）  
—— 一般教育を中心に ——  
昭和大薬：金庭延慶

（薬業法制史）

7. サリドマイド事件とスモン事件の裁判上の和解について  
日本薬史学会：末松正雄

（研究、技術史）

8. 医療品の偏光顕微鏡分析と渡辺厚先生  
昭和大薬：塩原仁子

9. ふぐ毒研究史補遺：Eykmanのふぐ毒研究報告について  
日本薬史学会：末広雅也

10. 「草木図説」の薬用植物について  
日野製薬：山口茂治ほか

（その他）

11. 国宝薬師如来と薬壺  
名城大薬：奥田潤

13:00～ 薬史学部会シンポジウム

テーマ：北陸の薬史

- ・石川の医薬文化史  
多留淳文
- ・なぜ富山に売薬業が起こったのか  
— 反魂丹の謎 — 難波恒雄
- ・富山の薬業における洋薬の受容  
大橋清信
- ・明治初期金沢における新興薬舗主の軌跡  
徳久和夫
- ・金沢大学薬学部130年史  
山本 譲



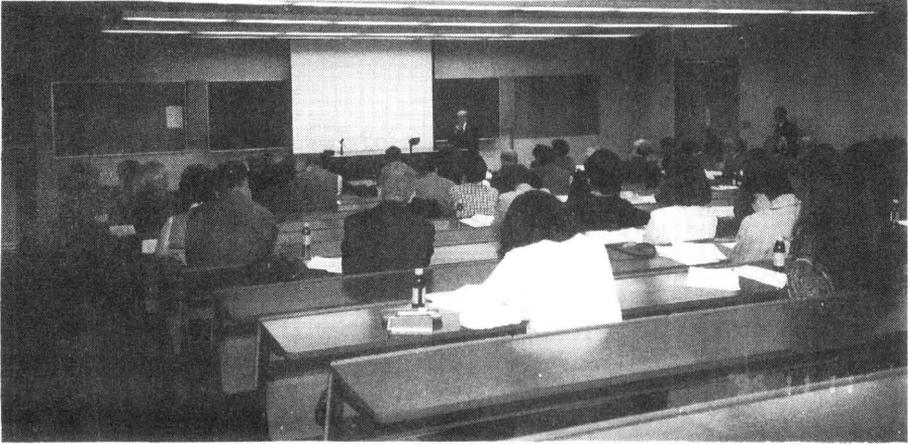
## 第5回医薬史蹟を訪ねる旅（中国）お知らせ

本会主催の「医薬史蹟を訪ねる旅」も第5回を数え、今回は中国と決まりました。

今日までに、社会主義中国として不可欠な中国側接待責任者として『中国薬学会薬学史専業委員会主任・馬継興教授』が引き受けられ、学術実務実行単位及び責任者として『中国中医研究院中国医史文献研究所所長・鄭全生副教授』が勤められることを決定されました。

数千年の歴史のある中国ゆえ、参観に限りはありますが、豊かな内容になる筈です。未だ航空運賃などの決定もないため、費用の計算や細かい点は未定ですが、コースの概要は既に中国側と何度か検討のやり取りを済ませております。

募集パンフレットは3～4月に作成されます。奮ってご参加下さい。



1995（平成7）年度秋季講演会（共立薬大）会場（11月11日）

## 第33回国際薬史会議（ストックホルム）ご案内

1995年9月25日よりフランス・パリで開催された第32回国際薬史会議にひきつづき、第33回国際薬史会議が下記のように明1997（平成9）年初夏に開催されますので、ここに第1報を掲載いたします。

# The 33<sup>RD</sup> International Congress for the Histroy of Pharmacy

Stockholm / SWEDEN

と き：1997年6月11～14日

ところ：ストックホルム、スウェーデン

内 容：薬剤の発展、生薬学の発展、臨床実践の発展  
薬物分析の発展、地域薬学の発展、その他

第2回案内を希望される方は、大会事務局に、氏名、所属、住所、郵便番号、国名、電話番号、ファックス番号を記して郵送またはファックスするように案内されていますが、日本薬史学会経由でも申し込めますので、関心のある方は本会事務局にご連絡下さい。

The Swedish Academy of Pharmaceutical Sciences P.O. Box 1136, S-111 81 Stockholm, Sweden  
Telefax : (46) 8 20 55 11

1995年11月08日

第5回 医薬史蹟を訪ねる旅(中国) (株) スペース

日 程	月日曜	都 市 名	発着時間	交通機関	摘 要
1	1996年 10月12日 (土)	成 田 (発) 北 京 (着)	10:00 13:15	JL-781	成田より日本航空利用にて北京へ 着後、市内観光 (天安門広場・故宮博物院等) [北 京 泊]
2	10月13日 (日)	北 滯 京 在	終日	バ ス	郊外観光又は自由行動 (万里の長城・明の十三陵等) [北 京 泊]
3	10月14日 (月)	北 滯 京 在	午前 午後 夜		中国薬学会薬学史専門委員会在京委員とのミーティング 中国医史文献研究所医史博物館・中国中医研究院図書館 中薬研究所等の見学 日本側答礼宴 [北 京 泊]
4	10月15日 (火)	北 杭 京 州 (発) 州 (着)	08:30 10:05	CA-1509	国内線にて杭州に移動 着後、市内観光 (西湖遊覧・西冷印社・靈隱寺・中山公園等) [杭 州 泊]
5	10月16日 (水)	杭 滯 州 在	午前 午後		胡慶余堂薬行及び薬史博物館見学 市内見学 (花港公園・保叙塔・飛來峰等) [杭 州 泊]
6	10月17日 (木)	杭 滯 州 (発) 西 安 (着)	午前 16:45 18:50	XO-9504	虎抱泉・六和塔見学 国内線にて西安へ移動 着後、ホテルへ [西 安 泊]
7	10月18日 (金)	西 滯 安 在	午前 午後		陝西中医学院医史博物館見学 秦皇嬴博物館見学 [西 安 泊]
8	10月19日 (土)	西 滯 安 在	終日	バ ス	耀県往復、孫思邈故郷 (葉王山・孫家原) [西 安 泊]
9	10月20日 (日)	西 成 安 都 (発) 都 (着)	07:40 08:55	WH-2401	国内航空機にて成都へ移動 着後、市内観光 (武侯祠・杜甫草堂・都江堰・望江樓公園等) [成 都 泊]
10	10月21日 (月)	成 滯 都 在	午前 午後		蓮花池薬物交易市场見学 成都中医学院医史博物館・薬物標本室見学 [成 都 泊]
11	10月22日 (火)	成 滯 都 (発) 上 海 (着)	13:40 15:30	SZ-4501	王建墓・文殊院見学 国内航空機にて上海へ移動 着後、外灘散策 [上 海 泊]
12	10月23日 (水)	上 滯 海 在	午前 午後		上海中医学院医史博物館見学 童涵春堂中薬店見学 [上 海 泊]
13	10月24日 (木)	上 滯 海 (発) 成 田 (着)	午前 14:15 18:00	JL-792	玉仏寺見学 国際線にて一路帰国の途へ 通関手続き終了後、解散

★航空機のスケジュールは全て1995年度のもの参照しております為、発着便名・発着時間等変更になると思われます。  
★現地事情・交通機関の都合により時刻並びに交通機関旅程の一部は余儀なく変更になる場合がございますのでご了承下さい  
[宿泊ホテル]各都市スーパーアクラス [食事条件]全食付き